



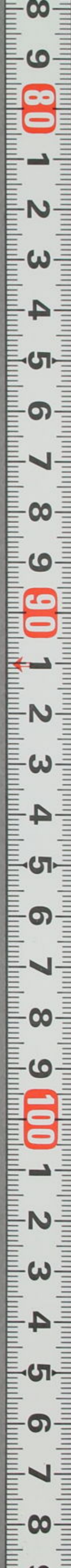
溫故目錄

五

不為  
孔季



~ 5  
2200  
4





利5  
220  
若

温故日録卷第十



神無月

應鐘

此月此律之是異説あり紹巴初学抄の  
景物よも十月此律の名也といまこり千五百番  
哥合母初冬哥云讚岐

輝くれてありまはるありのれきれお母こころる冬ハ本なり

六条院宣旨家集の序

或發句よ毎とこてこころる鐘乃ひきき哉

豊山有九鐘霜降而自鳴山海經よいる霜ハ鐘之別

小春

冬日其暖如春故謂之小  
春初学記嫌詞也 立言抄

温故卷十





十月、更衣 一日 掃部寮夏代御装束を撤して  
冬乃よあくるあわふ 公事根源 年中行

事哥合よ

あらしく露ものそぬ衣も然今とてぬきし初風

始氷月令

射場始 五日 射場席と年中行事り哥合よあり  
公事根源云先世月代三日よ左右衛門弓

場比棚とけく天子弓場殿よおさせ給ひく弓を

御覧すし公以下東帯して是とつる天子

射席とさるれく弓夫を御座代左右代とれよと

らう是群臣とひしとく弓を初給ふし誠よ文

武二つれ道二とかくへくさうら故よ今天子も弓場殿

よおさせ給て武道とさるるをゆふこ口傳よ射場始

かくハ賭弓もアアアす賭弓なくハ相撲乃節あはる  
ととくハ明題ニ為強

御垣もはけあつらふつとをさるまはれを始をれ  
年中行事り哥合よ

名のこつをあれもつら射席と今ハひりよとさるる家

殘菊宴 同日 群臣詩と作酒とぬまふ  
事重陽よたゆ 公事根源

木枯 色とびすしと冬こもハ秋と云説もわり也  
新式抄ころころハ秋冬風木枯なり但ころころ

の枯れハ初風もよあり野官哥合よ正通冬物  
と難して閑口早ハ雲御抄

本指乃枯れ初風吹ぬをなるとるあふりれ声とぬ  
誠よ時雨霜雪ととり初風と暮秋初冬

乃物なれも宗祇も困乃初風とさ一葉かおといり

孟文卷下



哥三集上下

時雨の世は四方此山より雪もふもやありれ秋の初風  
かやよふあり事とせ也

時雨

月よあつらふも冬也 流布  
三月よあつらふ但十一月まで也

泪

時雨の雨か

さる事とせ言

袖 | 川音 |

松風 |

木葉 | 各冬也

志卷

冬也寒雨は風のそひらるものこ雪の  
ふよとは雪志とせたり是れ雪とせたり  
ふよは雪と風とせたり雪志とせたりは雨と雪と風と  
三よは雪ハ雨雪二色此相雜とせたり三よは玄孛事  
古來抄物より小あやまりある事なりと祈式講

尺乃時可り志まゝ共西行家集。

くまよあつらふまわたり今初雪とせたり雪は雪と

霜

三月よあつらふ霜のさゆりも  
冬也初霜のさゆりも同前

花

月

雪の

初雪

初雪 | 富士 |

富士 |

未委可

見参

昔初雪の

天皇正暦十一年十一月より初雪見参とせり也桓武

らず深雪の時ハ必諸陣見参とせりといふは又

絶く久し又一條院の御時より雪の所衆遊口

不足ある所とせり此法願寺へ修る事は執事  
法師これとせり春雪も皆れ鼻の初



程カハ八取ノ衆以下必參内一して雪山と此兒を  
公事根源 茲人所衆こて廿人あり六位の侍  
可然葦補之職原  
抄あり林示秘抄よ委

凍 月 凍 寒 三月 月 寒 夜 寒 寒 夜

夜寒 寒朝 朝氣寒 今朝寒 冬也

炭竈 炭とんくり 炭賣

埋火 三月よりくる 火桶

櫛 夜分也或ハ十一月ノ景物入本あれも火爐  
ノ類乃次よこよ記之三月よりくる

綿 勿論冬 也流布

被 冬もた露なをいびもしくハ秋ニ但露乃分  
してハ冬ともとり 垂言抄 師説ハ秋カトリ

久太羅野 野ノ名也 八雲

枯野 植物よ打越と 嫌へー 流布

名草 枯 秋也 流布 只りハ冬カトリ

枯生薄 秋也 丈木才九ニ為家哥よ枯生尾花と

凡さゆの富士れすも雪くあさりきかきこみ尾尾記書と云



賜枯葛葉

おとひても冬也かつ落葉  
すうはうろくしー 流布

紅葉散

紅葉散て物と傳ふ冬也新式 是ハ紅葉乃  
ちりて松をよれやの物れ上のちりては事也

紅葉散初也

紅葉散

は月たしは心じこひ  
てもさか冬は長 流布

黄葉流

も冬也  
流布

紅葉進

只紅葉れちりて  
ころと云こ 藻塩草

後撰 羈旅哥

草枕りららひりらよむささく心とささくめなまらや  
すしやささくさみらひりられ文属 宵柏

大發白帳は冬乃部はあり

木ノ葉

本此葉のさるに月をさ  
じとひくも冬ささく 流布

一衣

一雨

一舟

いづも  
冬也

落葉

本此葉同  
三月よわろ

朽葉

色とほひて  
秋は冬迄

名木枯

これ冬  
なり

柳枯

ちの類  
冬の冬也

凍柳

冬の柳也

網代

一利 氷魚

十月比乃景物也 八雲御抄  
彌音小今案俗云氷魚是

也初學記冬事以對雖有氷魚霜鶴之文而尋其  
義非也ヨキ小魚名也似鮎魚長下二寸者也 順倭

名網代して冬大和物語  
は氷魚乃使と云事もあり

柴漬

積柴於水中一魚得寒入其裏因以薄圍捕取  
之順和名 日本紀は柴こくはく少く下はり



采あつても只本枝と水子さうりはらう其あつて  
 たりよ魚と積てさう藻塩草 霖亦作松爾雅  
 岑倭名 但言抄云少しはをふ采面と嫌へ  
 日本紀に柴とくはくゆとあり然ハ抄とも嫌へ  
 秋十月はら物とんく堀河院乃御時百首  
 此哥なりきり時初冬心とくゆりきり藤原仲  
 實朝臣

いらはろふれりて少しはをに崎輪れり冬は来り  
 或ハ十一月は景物といりすく三月はもくく  
 氷はおりくよと合たり  
 少しつきよまのりりすと釣れはこきんもは氷り  
老の千載

温故目錄卷第十一

霜月

狩使

寅日 豊御狩 此ハ五節所は狩りん  
たれふわて狩りてミドなをゆめさけし使のあり

とられ使のハ也是とくは少狩ハいり杯五  
 節の舞姫のとりハ清御原天皇吉野の宮  
天武天皇也  
 ましくて琴と弾りひり時まの心の岫より雲を  
 天女あまのりて琴は曲は應りてあまの羽衣は袖  
 と五度執りてまひく

ちをあまのりてまひくすもわをたをなふりてまあまひ  
 こくこひきりさうや五節のりりめなうさうやあまを  
 天平五年五月はまうく内裏く五節は舞ハ



ありてはもと本朝月令公事根源をたゞし  
日教を以てはわたりは侍とわかるとはなまも  
堀河百首の哥也万代三品見と猶仁哥云

鎮魂祭

中寅日 是れ人魂魄の二玉あり魂と陽  
氣魄ハ陰氣也此祭ハ離遊の運魂とま  
てて身神の中府はあつひる功能あり宇摩志麻  
治命の時より事おるより旧事本記なま  
るる此祭と如法よをまありけれ殊勝の涉  
りかへさやまは白川院ハ涉脱履の後も院  
中より猶行れゆる東宮中宮しても年くわ  
る事天女二年母よりけれと真行せられて  
貞觀元年十一月神祇官して行ける今ハ年  
の幸よなれと公事根源 支木前中納言為並

新嘗會

日陰としてわくわくするなりつるなり此世をて  
中卯日 新嘗祭ハ神今食よにわく  
ひつてりす十二其外ハわくす是ハ今年  
れら縮と神よ奉りせ給ふ也代り始ハ大嘗  
會のハ年とのハ新嘗會と也ト食ハ人  
摺衣日藻と着寸用明天皇二年四月より新  
嘗の事ハより大なるハ神代より事ハわ  
日本紀よも天照太神あるなりと  
より公事根源 新嘗言塵 年中行事哥合  
いゆる秋おとろいふたむきで年ゆらけはめ  
豊明節會 中ノ辰日 是ハ今年の縮と神よ  
世給て今日君とまきより臣下小  
相弁小忌とさるよハ諸司の小忌と束帶の



よきこととせしむるを青摺をとりわく上  
 心とせしむる外弁の上首とせしむる南殿のひきよむる  
 子とせしむるけて内弁以下座ははく白酒黒酒の盃を  
 そりて大歌別當大弁りゆりて舞姫のり五度  
 袖をかへてかへりしれとにせしむる上達部五節所  
 そりてひく催馬樂もとせしむる節會の發考は  
 節會の程露臺の能舞こひんてとせしむる殿  
 上人とせしむる候をもとりひく節會の座とせしむる遊  
 ろ事とせしむる塔とせしむる人を侍帳の東よりとせしむる  
 以事とせしむる書司は侍とせしむる手とせしむるこひ十六日  
 の節會をたんとせしむる時ふとせしむる此事はとせしむる也  
 今日辰の日此節會ハ大掌會の時ハ辰日とせしむる也  
 紀の節會巳日とせしむる主基の節會ニヤリヤ 公事  
 根源 しかる事とせしむるは惣して節會の名あり

きふよかきとせしむるす其志とせしむる六百番のりの哥合よ  
 かきとせしむるあり事也 年中行事哥合注 日本  
 紀の宴會とせしむることとせしむるありすこととせしむる冬よとせしむる  
 句とせしむるた去大法ハ豊明此節會霜月とせしむる本と  
 す年中行事哥合よ  
 かのなとせしむるはかおとせしむるをふとせしむるふとせしむる人  
 豊御 杖 悲夏冬也 神祇也 訶林良杖  
 云大掌會の御襖此事也  
 小忌衣 の字ありてもなつてもは字なれたりて文字  
 濁源源氏幻の巻五とせしむる比乃西は頭中將  
 卷人少將なとせしむるはとせしむるはとせしむるはとせしむるは  
 けめやすくとせしむるあり河海抄云小忌青摺山藍摺  
 也花鳥云十一月中卯日新掌會辰日豊明節  
 會ハ山ありとせしむるはとせしむる小忌とせしむる物とせしむる也

源氏物語



一代は一度は<sup>大嘗會</sup>大嘗會もわくの<sup>こと</sup>こと  
 一条禪岡宗祇は<sup>神樂</sup>神樂傳授は<sup>大嘗會</sup>大嘗會は<sup>説</sup>説云<sup>小忌</sup>小忌といふは<sup>神樂</sup>神樂の<sup>衣服</sup>衣服也白き布を張て<sup>山あわ</sup>山あわの<sup>草</sup>草として<sup>榎木</sup>榎木と<sup>摺</sup>摺る物也大なる<sup>狩衣</sup>狩衣のごとく云<sup>五節</sup>五節は<sup>舞人</sup>舞人の<sup>衣</sup>衣也<sup>賀茂</sup>賀茂は<sup>臨時</sup>臨時の<sup>祭</sup>祭又<sup>大嘗會</sup>大嘗會の<sup>時</sup>時用物也<sup>巴説</sup>巴説大忌衣といふ衣も<sup>け</sup>け時<sup>用</sup>用云<sup>云</sup>云<sup>神祇</sup>神祇<sup>小忌</sup>小忌<sup>袖</sup>袖<sup>青摺</sup>青摺<sup>ハ</sup>ハ<sup>小忌</sup>小忌の<sup>事</sup>事也<sup>臨時</sup>臨時の<sup>祭</sup>祭の<sup>舞人</sup>舞人の<sup>ハ</sup>ハ<sup>青摺</sup>青摺<sup>ニ</sup>ニ<sup>名付</sup>名付<sup>大嘗會</sup>大嘗會<sup>乃</sup>乃<sup>と</sup>と<sup>凡</sup>凡<sup>小忌</sup>小忌<sup>と</sup>と<sup>云</sup>云<sup>辨引抄</sup>辨引抄<sup>山藍</sup>山藍<sup>袖</sup>袖<sup>山藍</sup>山藍<sup>衣</sup>衣

日吉臨時祭

中申日 是は建曆三年十一月十八日より  
 延曆寺の<sup>流</sup>流後長樂寺にて<sup>官兵</sup>官兵の<sup>あ</sup>あふ<sup>お</sup>おひ<sup>く</sup>く  
 誅<sup>せ</sup>せら<sup>れ</sup>れ<sup>ら</sup>ら<sup>る</sup>る<sup>事</sup>事として<sup>御願</sup>御願あり<sup>き</sup>き<sup>と</sup>と<sup>ぬ</sup>ぬ<sup>公事</sup>公事

此祭

下ノ酉日 賀茂臨時祭也先兼日<sup>試樂調</sup>試樂調<sup>祭</sup>祭  
 石清水の<sup>あ</sup>あゆ<sup>社頭</sup>社頭の<sup>義</sup>義として<sup>使舞人</sup>使舞人の<sup>あ</sup>あ<sup>系</sup>系<sup>く</sup>く  
 わり<sup>立</sup>立<sup>儀</sup>儀<sup>を</sup>を<sup>誅</sup>誅<sup>麻</sup>麻<sup>の</sup>の<sup>御障子</sup>御障子と<sup>し</sup>し<sup>し</sup>し<sup>引</sup>引<sup>衣</sup>衣  
 一<sup>歩</sup>歩<sup>草鞋</sup>草鞋と<sup>し</sup>し<sup>額</sup>額<sup>前</sup>前より<sup>出</sup>出<sup>御</sup>御<sup>せ</sup>せ<sup>ら</sup>ら<sup>る</sup>る<sup>事</sup>事<sup>階</sup>階<sup>乃</sup>乃  
 向<sup>の</sup>の<sup>あ</sup>あ<sup>り</sup>り<sup>北</sup>北<sup>庭</sup>庭<sup>南</sup>南<sup>北</sup>北<sup>二</sup>二<sup>行</sup>行<sup>の</sup>の<sup>座</sup>座と<sup>し</sup>し<sup>て</sup>て<sup>使舞人</sup>使舞人の  
 召<sup>人</sup>人<sup>は</sup>は<sup>神樂</sup>神樂の<sup>所作</sup>所作<sup>人</sup>人<sup>倍</sup>倍<sup>徒</sup>徒<sup>近</sup>近<sup>衛</sup>衛  
 寸<sup>階</sup>階<sup>乃</sup>乃<sup>下</sup>下<sup>の</sup>の<sup>頭</sup>頭<sup>已</sup>已<sup>下</sup>下<sup>に</sup>に<sup>さ</sup>さ<sup>て</sup>て<sup>使舞人</sup>使舞人の<sup>あ</sup>あ<sup>の</sup>の<sup>勸</sup>勸<sup>盃</sup>盃<sup>お</sup>お  
 け<sup>く</sup>く<sup>神樂</sup>神樂<sup>あり</sup>あり<sup>庭</sup>庭<sup>燎</sup>燎<sup>と</sup>と<sup>し</sup>し<sup>て</sup>て<sup>朝倉</sup>朝倉<sup>其</sup>其<sup>駒</sup>駒<sup>ま</sup>ま  
 て<sup>ら</sup>ら<sup>庭</sup>庭<sup>火</sup>火<sup>を</sup>を<sup>も</sup>も<sup>ら</sup>ら<sup>哥</sup>哥<sup>あり</sup>あり<sup>を</sup>を<sup>長</sup>長<sup>階</sup>階<sup>の</sup>の<sup>あ</sup>あ  
 け<sup>く</sup>く<sup>神樂</sup>神樂<sup>あり</sup>あり<sup>緑</sup>緑<sup>有</sup>有<sup>此</sup>此<sup>祭</sup>祭<sup>は</sup>は<sup>と</sup>と<sup>り</sup>り<sup>ハ</sup>ハ<sup>宇</sup>宇<sup>多</sup>多<sup>御</sup>御<sup>門</sup>門  
 大<sup>明</sup>明<sup>神</sup>神<sup>を</sup>を<sup>り</sup>り<sup>て</sup>て<sup>臨時</sup>臨時<sup>祭</sup>祭<sup>と</sup>と<sup>給</sup>給<sup>へ</sup>へ<sup>ら</sup>ら<sup>る</sup>る<sup>事</sup>事<sup>ハ</sup>ハ<sup>御</sup>御<sup>を</sup>を



此は我ハこやうれ事知つて御門へ入させ給ふと  
さき給はれし屋ありてヤこころほくせありひき  
つ程かゝりておひりやとよふ位ははせ給はれ  
し寛平元年十一月より臨時祭をなすてしむるふ  
其時の使ハ本院乃大臣時平公つと右中おと  
此はあたまひきるとぬん 久事根源 調樂ハ千代  
宗祇帚木別勅 江次第委

日蔭絲

日蔭、鬘カサ 衣ハ新堂會かど神事乃  
時人著とる装束也日蔭の糸うづな  
同神事の時くる事也花鳥餘情ハ新堂會  
豊明節會ハ小忌ときる人日げれづと  
冠ハわくも也日蔭草カサとハさかりけと  
じまびくわくるハ日げ草カサハわくぞと日げと  
かづと日本紀第一ハありし事ととき

日蔭糸ハ白き糸と総角カサして左右ハ筋スサ或ハ十  
二筋と冠乃左右ハ角カサハまじりて垂タレ也  
又新式抄ハ日蔭乃絲カサと賀茂臨時の祭の時  
かどくまゝハわくも也天照太神入于天石窟イハヤニ閉カサ般カサ  
而幽居カサ号カサ乃六合常闇晝夜不分群神愁迭ウツク  
手足カサ間措カサ爰カサ天鈿女命以真辟カサ葛カサ為カサ鬘カサ次  
蘿カサ葛カサ為カサ手カサ繼カサ歌カサ舞カサ  
一形カサと今ハまじりて云

神樂

里 非居所 新式 大内乃外 庭燎

俣幣 杖 篠 弓 劔 鉾 柵

片折 諸奉 葛 韓神 以上採 物哥 宮人



木綿志天

難波浮

前張

階香取

井奈野

脇母古

以上大前張也

薦枕

閑野

小菅

磯等崎

篠波

殖槻

総角

大宮 湊田

蚕

以上小前張也新式ニ云神樂名之蚕准繪但秋、季よハ不

可用之神樂方と可レ為本

得錢子

木綿作

明星

以上星

晝目

湯立

朝藏

其駒

歌なり

竈殿歌

瀝殿歌

神擧

以上雜歌也神樂ノノミハ此ノ外

東遊求子

神祇也新式神樂ノ名也ノミハ此ノ外冬也攝家胤白殿ナリノ賀茂ヤウノミハ

神參ノ抄ハ必東遊求子ナリト云フハ四季

ノミハ地下ノ未人ノミハ此ノ外冬ノ非冬ニモ

冬ノ非冬ニモ神參ニテ此ヤウノミハ冬也求子

非人倫也新式抄或書云神樂ノ名ト云ハ説カ

キテモ梁塵秘抄ナリト云フハ常ニ胤白殿ノ賀

茂請ヲ云フハ此ノミハ冬ノミハ夜分ノ

ミハ此ノミハ先冬也神樂此ノミハ依テ其義

ヲ云フ云新千載ノ賀哥云前中納言實任

云々千代ノたりと云フハ此ノミハ此ノ外

云々



雪

花

降物也非植  
物非正花

沫

冬にけりしもの流るる春の  
雪に但万八は十二月

あはれ雪あつとつり八雲

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

西行家集

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて

源仲正哥

あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて  
あはれ雪あつとつり八雲も梅の花さくはゆめをばりて



隨意

萬葉の如斯く有りそれかまうと云心之但又  
間心之もやと云る八雲抄抄順日本記

古今離別哥

去る初雪の山志を孫も書けすんくわん  
是ハ雪のゆきせとく孫も初雪ハありの心祇注

富士

富士ハ初雪今ハ冬ニ用也中比ふり雪ハ  
初雪初雪を年々

の雪のこく富士雪成冬同初雪も冬同消と云

ことろ万葉第三赤人詠不盡山歌云

富士ハ初雪ふり雪ハ初雪の十又月消雪を和初

ハ舟と信して中比ハ富士ハ雪ハ雜也消と初雪ハ夏

よすこと宗祇の袖下抄ありと云る兼

載式ハ百四十六首中ニ證哥と云され又新筑

波集ハ引句をどわりと云るゆかりハ當流不用

或人云宗祇宗長ハ時分ハ富士ハ雪と雜ハ

きと赤人ハ望不盡山歌

田子ハ浦ハ折ハてハ初雪ハ富士ハ雪ハ初雪ハ

と云る萬葉ハ雜哥と新古今ハ冬の部ハ入れ

ハ定家家隆ハ時此ハ万葉の哥と不被用と推

量してを代々ハ用也事ハ初雪ハ家ハ不記之

子初雪ハ用也事ハ初雪ハ家ハ不記之

山 天竺の山ハ唯雪のありと云る

事ハ初雪ハ山類也又源氏朝顔ハ中宮ハおま

ハ雪ハ初雪ハ山類ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ

流布 二色ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ

ろけハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ

初雪ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ

降物ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ初雪ハ

月一 月霜







水

三月より氷の流るるも冬也 流布  
冬也 氷の流るるも冬也 流布 月 非水辺 新式

只さやうなる事也 但氷より流るる  
月の夕神の可為水邊 薄氷 氷の流るるも冬也

てと冬 也 流布 氷 露氷 冬也非 水邊 泪 雪霜

氷 非水邊 嵐乃水 袖 衣 帶

鴈音水 同前 流布 紐鏡 氷の流るるも冬也 藻塩草 亦水面鏡 氷の流るるも冬也 今より

一橋 一枕 鳥鳥 一関 氷蠶 支那 真 嶺 山有氷 蠶

以霜雪 覆之 作絲長 一尺織 為文 錦入 水不 漏

火不燒 東坡句 云 氷蠶 不識 寒火 鼠不知 暑  
是也 下學 氷よりひくまもなる 氷の糸 宗祇 句の  
ハ 氷の糸長く 氷をえんと 氷蠶 かくるる

氷柱 水邊也 垂氷

東蝶 冬也 無言抄 和漢篇より

水鳥 三月 浮寝鳥 水鳥 浮鳥 今言抄 嫌詞

とあれども 今ハこれす 新撰六帖 水鳥の哥 云

信實朝臣 新續古今 第十七 水鳥と道 善法師

定りあるを 氷の流るるも冬也 今より







ちとちとあひあひしてゐてゐるゝりもひもひも仍ちたを  
 云也但ちちちたさうさ山の志ありとていふも不審あ  
 まもちちち餵いかにあひあひしてゐる綺語抄云  
 一ちち小ちたれ名はわらたれあち私云鶴と云あり  
 袖中抄畧記之西園寺百首れ註は八羽師國より  
 出さるゝいふもあちと鶴と云字と著雁鳥と云あり種々  
 の謂あり或物なはちちちやと云説も作り其外さぬくま  
 てちちちちちちちちちと云説も作り其外さぬくま  
 云也七月の部ちちちちのちちたれちちも記之藻塩草  
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち  
 名ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち  
 ちちち一歳のちちちちちちちちちちちちちちちちちち  
 當年のちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち  
 若ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

單一ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち  
 巢ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち  
 新一説秋八月と也藻塩草  
 其義非也冬と也  
 持  
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち  
 一ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち  
 一ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

偷起鳥 百首注人よんちちちちちちちちちちちちちちちち  
 かりけりきての義也小  
 藻塩草  
 慕鳥立 鳥味  
 後ハチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチ  
 抄ハチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチチ  
 教草



落草と云事也多る所と 鳥落草 草取鷹ハ

多と草よといおろしてちんちんすして多の落草

とらると云也又草らるともいふり 藻塩草 ちんち

追まらして多れらるとらると草らると也又草乃

よはさして可知事共八百千丈此命よと

煖鳥 寒夜ノ鷹鳥と捕て生あゝ足と

あゝゝゝ明もはくたか三智抄

温故日録卷第十二

師趨

唱佛名 十九日 被綿 廿一日也或

一夜も例あり仁安殿の御本其成りなり

て清懐れ中よりけく南北額れ間よ又南北に机

たて佛像塔形とて佛前よ香花やとせせ

寂勝講れより出居れ前よ火櫃よおり松てす



かき善人沙導師此肩カわつらる事ハてく名ナ謁ケ  
 あり所衆遊カ口まカいふたなる栢梨カ此勸カ益カたカく云  
 幸カとそれハ右近衛府の領カ攝津國栢梨カ注カ  
 以所カり御酒カと奉カり殿上カとて勸カ盃カ乃カあカて  
 栢梨カこカ所領カ乃カ名カとてゆカくや又佛名カ中  
 の夜カあカと大ゆカれカありあり弓場カとてせカつた  
 右大將カたカ子抄カハカつらカうカらカす程カあカとゆカくとカ  
 えカとカかカ佛名カ此沙導師ハ昔ハカあカとカさカとカ  
 一カ延喜乃沙代カたカふカハ夜カ沙カ殿カとカ和琴カと  
 三カ合カ強カとカとカやカいカ仏名カとカふカハ三世カ此諸佛カ此名  
 号カと唱カて六根カれ罪カと滅カとカふカハ誠カ一佛名カ經カと  
 号カ所カ此功德カハカりカまカとカやカ寶龜カ五年カ十二月  
 諸國カとて殺生カ禁斷カのカりカ格カとカふカハカ年カ根源

貞觀カ此比カとカ一萬三千佛カとカるカづカよカあカりカて諸國  
 へカりカせカ終カあカりカ國史カ此記カよカえカ及カいカりカ今カハ吉  
 日撰カりカり

是拾遺愚草貞外上カ冬夜カ此哥カ也カ松カハ佛名カの  
 夜カよカかカとカふカ事カ欽カ可カ尋カ之新撰六帖佛名カ光後  
 六百番哥カ合カ顯昭カ哥カ之後カ頼家集カ佛名カと  
 又カ此カのカ沙カ名カとカるカとカふカハカはカとカるカのカらカとカるカ

追カ難カ 晦日カ ちやカらカ小聲カ 鬼カとカいカとカ陰陽カ寮祭カ文カとカりカて南殿カ此邊カは  
 立カて桃カ乃カりカあカれ夫カとカるカ仙カ花門カとカりカ入カて東庭カ

五文巻三



とく御口此戸はつこひ御前よ灯をちりくとも  
す東庭朝餉臺盤所のみまのこころりよ灯臺  
と隙をくめてくさる追儼といふ年中代疫キキ氣をハ  
らふ心也鬼といふハ方タテマツ氏乃事也四月ツキありておそり  
きぬ面オモテとて手よそや成あり又ヒキ子とて二十  
人縛の布衣さうりのをヒキ碎して内裏ウラ代四門と  
まらうと慶雲二年十二月より一箇の年天下よ  
百姓おろく疫キキ癘ヒはなやまされゆ故に公事根源  
ひる源氏よなやふあこりゆらも儼と追してゆら  
ありをらうと追と云こころ業也 年中行事キキ哥合注  
業すた儼ハ疫とといひる事也戲のやうなれ  
どもいれ礼として周禮礼記論語よものせしむる  
もの後世と乃礼儀志よあらうと云事なり  
此文文選よのせしむる張衡チキウが東京賦キウキウよ詳ツギなり

又後漢志第五よあり追ツキ此字をやらふことじ也  
儼ゲン一字をもをさるいことじ也源氏幻よあらうん  
ともありまふ宣言  
あつとこのをさるる事といふこと人やらうん  
九まれのとりやらふあのことらむらうゆら  
同集隆季御哥也年中行事キキ哥合よ  
今こころいれたりてあれ夫のいふことくも年と並あ

年終玉祭

和泉式部哥也

玉まつる年れとりよはをりたりや又とわんことん  
是ハ詞花集よ歳暮れ哥曾祢好忠詠也清少  
納言枕双紙よゆつりてとてふをいれはごりあり  
と記わさして記人のさひ物よとてありあり



よつてつるかこ歳乃終の玉まつり十二月廿五祭盃  
荷葉とてくやうは襟とくひ物とてくあつて報恩  
経十二月晦日午時來正月一日卯時歸  
あり此外より聖靈乃來我あり彼經委  
爲同見 堀河百首は後頼朝臣の哥に思ふは心ハ  
これ毎日の長高き岡よのりて羨とてささぬ  
きて遥は我家とて思ふとわらる年をべさ吉内  
事見ゆるとてことむとも明年は吉相とていふ

荷前

撰吉日 先十三日よけきくと兼てささぬ  
使ハ公心のも殿上のもく次官をひくり荷前  
使の定乃決むくよ元日れ擬侍従乃ささぬわら  
是ハ朝賀乃ともめ朝賀かた時と猶このささぬわ  
つてや荷前ハ十陵八墓は年れとら幣帛

とてせゆ先十陵の第一天智天皇は御馬よめされて山階乃  
城國山階よりり也 此中門御馬よめされて山階乃  
里は行幸ありて其まゆ御所ハささぬに崩所  
とて共知人なりとて御所ハささぬに崩所  
よ御所ハささぬに崩所  
さ其外ハ自壁天皇は田原は御所ハささぬに崩所  
の相原の御所ハささぬに崩所  
明天皇深草は御所ハささぬに崩所  
及んて公事根源 延喜式祈年乃後代祝詞  
よ荷前とてささぬに崩所  
製人之の御所ハささぬに崩所  
荷前の御所ハささぬに崩所  
とてささぬに崩所  
行事哥合



内侍所御神樂

つらつかたあはれとてあはれひしてうららめしうららめし  
 撰吉日 此御神樂ハ一条院此御時  
 隔年より行つる美保より  
 行つる年々の事より成より壽永此乱よりして内侍  
 所西海より渡御なりて三年よりして事なれり都へ  
 つて参り時ハ三ヶ夜の御神樂なりとありそれ別して  
 臨時より行つる大々神樂とて天照太神あはれし  
 さいしてこころあり時諸神此のりゆされしとて天鈿目命真  
 碎葛と髪と羅と手綱はして歌舞庭燎とて  
 いみへより行つる事なれり我朝の風俗神代の縁  
 起他よことありきよや其儀式かゝるの委事ハ猶公事  
 根源より行つる名目抄内侍所とも賢所とも云也

年内立春

古今每年れらるるまゝとあるより  
 つらへ春は哥は入連哥より冬なり

年木樵

正月よりゆくへ  
 薪とて事也

衣配

冬也雑也といふ説ありとあり 流布 來正月此料より衣  
 と師趨よりゆく事ハ源氏玉より此巻よりあり

曆未

曆卷果 曆卷返 曆右卷 ひとらてれり  
 共志より事也新撰六帖師趨哥知家マ

一年れより行つる事とてまゝとてのりぬれり  
 惠慶法師歳暮哥也源仲正家集歳暮哥云  
 行年とてこれよりゆく事とてまゝとてのりぬれり

春と隣

歳暮也但晦日より  
 すといひあり 藻塩草 春近

待春



守歳

冬也新式聯句の中より新式抄云午を  
——と抄ぬ事也大晦日此夜あまの夜分なり

堀河後百首よ除夜よ基俊

いづくもよとあまの夜分今もこの年と移る

年籠

ま木ニ歳暮の年信實朝臣

あひらくよあまの夜分今もこの年と移る

年の終

行年 年歸

流年

年滿

歳暮

三冬盡

温故日録卷第十三

非季詞

栗守神

植物ノ類也雜也 流布 大和物語

栗守神の神の御名を云ふに栗守神なり

栗守神の神の御名を云ふに栗守神なり

栗守神の神の御名を云ふに栗守神なり

栗守神の神の御名を云ふに栗守神なり

栗守神の神の御名を云ふに栗守神なり

栗守神の神の御名を云ふに栗守神なり

栗守神の神の御名を云ふに栗守神なり

栗守神の神の御名を云ふに栗守神なり

栗守神の神の御名を云ふに栗守神なり



とらりしてハハとさるる他木とたつねるる詠歎他木を  
ゆりんとさるるす無名抄云紫りりれ神とハ木れ  
多とすの神木よおりす袖中抄略記之細流  
云紫守神ハ柏木ハ限り諸木よりり樹神乃  
名也金葉集秋部月前落葉源俊頼朝臣  
嵐とや紫ちれ神とあはるる月と紫の多句一てきり  
此哥落葉とらり證哥ハ後代の哥とも引用は  
信濃すは明神の祭ハとせよ

諏訪祭

七十五度あるゆハ雜なり

駿可舞

昔すは國うことゆハ神女あまきりてまじ  
いと野豊乃まのひはくまふと今ハま  
よひことあまのひはすは是也

袖中抄此哥後拾遺云式部大輔資業伊予守

よゆるのめ玉れ三鳴明神ふあつあそひ  
してさすつりきと能目法師よりさる

梅宮

櫻官 非名取修跡  
未社也 流布

神事

鹿野菟 佛乃法を説多る鹿野菟此幸をた  
雜也 流布 句神よりり秋多る

涼道 極樂の事ありハ雜  
也 流布 句神よりり

黄泉 非夏三途乃名也非水邊  
黄泉神代卷上兩点也

ヨモツクニ



浙之滌尔菜摘流布

觥月 心は二句嫌也心乃月也非秋釋教なり

心月 釋教也非夜分新式月は七句去也心月輪乃素也同面は秋の月可有之又これより月とわらる事

もあり流布心乃さる此事心のあらう事なり也胸此月日同前新式抄各不可為秋但秋とてす

新式増抄是はいさ少もあつた秋なり

穀梁傳云陰陽相薄感而為雷

雷

詳は性理大全より見たり

西吹風

此師吹も雜也袖中抄云いねわれ風とありとよ

天浮橋

非水邊下此事也

櫻

拾遺愚草中ハ思ふ心はさるひびけり櫻はさるのハまれをさる

辛花

辛乃ひらき

加遠

其方ハハゆで先ことりて其方とたて其心さるる事也拾遺抄ハ委源氏帚本の卷中河乃方た久も内裏より葵上乃清方ハ天一神ハさるる事ハ也帚本ハことひら神さる

中中央神とて中神とも云又長神とも云也兩系之天



一神此事也内裏より天一神此よりあつるよし 細流  
 金櫃經曰天一立中央為三十二將定三吉内云立  
 中央の故より号中神天一神地星靈也四方より五  
 日づ四隅より六日づ巡行すかやうより目と重祓て長  
 くあつるゆへ長神ともいふ此神のますくを塞ぎす  
 巳酉より丑卯角より六日ありし卯より東より五日あり  
 庚申より辰巳角より六日あり丙刀より南より五日あり  
 辛未より未申角より六日あり丁丑より西より五日あり  
 壬午より戌亥角より六日あり戌子より北より五日あり  
 癸巳より辰巳角より六日あり丙刀より南より五日あり  
 天つあがり竹小見天一天上と云ひ日より十六日乃同  
 し八方へ行ても障り此神乃ち功一功は凶中(方違  
 あつる事なり抄 順倭名云天一神 天女化身と  
 大白神

ひとあがり共金葉集

きこはるはあがり此神と云はけあよあふ事の方あつるん

作田 雑也 堀田 去るより云説あり尋其儀非雑

野遊 非春 新式

有水 雑也ひとあつてハ夏也ハ水と結ハ雑なり新式  
 汲より分つてくも夏ハあつるすこつり 流布

水烟

汲花 水邊可嫌之植物不嫌之 新式 汲は花らつる  
 秋心なるまハ正花也志るハ春乃季也植物より立

句嫌也如此受師説也冬乃句あつて入てハ正花  
 あつる春よりあつる植物よりあつる但句神よりあつる



花よたるとらちまるといつたり  
とも正花よあらず春よあらん 流布

瀧殿 六釣殿夏之泉よのそとら其也二或物よあり梨

桐壺 殿ううらう也 咲花抄 ちくけいともひめくさぬ  
下名淑景舎といふ在照陽舎北 順倭名清涼

此字假名よハさとわく朱雀院もすくわんとす  
忍春をもくらぶまかされどもよむ時ハ志やとよむなり

げい志やとよむ一 辨引抄 桐を庭ようらる  
は母桐壺とリ也舎をつらとリやたるとハ雜舎か

らに殿也 年中行事哥合注

梨壺 照陽舎在温明殿北 順倭名 梨を庭よう

られゆりきとや 年中行事哥合注

橘都

藤原都 藤原宮 非植物 友原のくも氏代事かハ雜也  
流布 友原のくも氏代事かハ雜也

志賀山越 有為春之説然而近來非春 新式 志賀  
山越ハ北白川の流りこらうららのかりま

如意嶽 志賀へ出る道也志賀ハ城ハ志賀  
さうすいつとすも事也但堀川の次郎百首ハ春

の題ハ此れより六百番哥合も春乃題よこき  
堀川ハ百首を例よせらぬ一 詩林良枝 志

まよし連哥よハ雜也其

中ハ袖中抄ハ猶委



須磨霖雨 霖雨 夏也但其儀あつす不可為夏 新式昔

萬葉第十九は霖雨霖雨又神代の上巻は

霖霖と一字は霖なり兼名苑云霖三日以上雨也

雜也かどらんハ雨の名のとあり

霞雨

名所よありと云説あり 流布 山城の名所也

霞谷

草少兒履の名母をくしてるハ草也

深草れんをこれ伊國忌乃日よありと詞あり

柞森

山城 名取

柞山

同山城ハ雲歩扱あり喜言扱よありと云ハ秋よ

木葉里

越中現存ハ後光明寺抄改

又夫本よあり

平あり

木葉沖

近江湖の沖也

藤河

表濃世の表川あり

泉河

山城

花山

山城名所也句祈よありて可為春咲白ふ

櫻川

常陸非植物水邊也他准之



櫻井 山城

名取

櫻山

近江名所方角あり同名丹波あり櫻の山  
こらめりて近江也櫻山の字なくしてある丹波

櫻谷

近江又菟代詞は頁余こらり八雲抄抄俊頼家  
集は源後重

花多てさくらたなとらんよゆーあまたもあそびたのきさ  
は新八田上りて八月とらりははましくなりきりよいて  
そいさうはわくよさくらたあまらきりきり道のさくら  
きりしやとていあうとらり拾玉集才四よ  
あはれやとていあうとらり拾玉集才四よ

月林 山

月輪

同上後拾遺第十八よ

さびの果るるに宿成るはまきふ月はたふさあり  
月はふ心をけし夕らふるの事とまてとらり  
け新八同集釋教部は月輪觀とらり月輪不入名取

星月夜

堀河次郎百首よ

我はら鎌倉心と越の星月夜とらり

有明浦

越後ま木よ

よめり新あり

有明山

信州或

越前

月山

出雲ま木

よめり

照月山

末勘哥

枕あり



五月山

栲澤一説佐伯山乃字入て之  
しるす事あり但句母しり夏あり

月里

山城  
八雲

月讀里

近江支木  
よ事あり

月讀杜

伊勢

月讀宮

同八雲

月讀神

伊勢外宮  
御事月

よき男  
といへり

月弓尊月夜見尊月讀尊

一神三名紹  
巴乃説也

雪山

不可為山類

新式

天竺大雪山乃事也

谷うらら衣より方とわしうに在臨るゆふりやう人  
かしくらり流布新撰六帖光俊哥也雜也句神  
依て冬也天竺小常は雪も山

雪消澤

大和堀川百首

春日野君けははは神られてるるふとこせらと

雪白濱

但馬  
八雲

雪高濱

佐渡哥枕  
よららり

右氣山

未勘哥枕よららり  
右者花月君よけく一し

す事と少く載之あまのひくそのまう志事る物ハ不入又  
よのけひれ名所よまきう事あまとも際限たはれ  
は大綱とあらう物自余雅之名所ハ悉雜たり  
野緑山乃緑赤と植物よ何と折越と嫌也流布  
野乃緑山の緑ハ非秋青色とられをあらす  
野山よむとひくも秋小あらす



野ノ滋シ

野なりといふ植物打越嫌但露志を記  
野なりといふ植物は不嫌之流布

稠チウ

雑也植物は  
打越嫌なり

山橘サンキョウ

雑也萬葉第十九よ言たりと詠合る乎あり  
我しひを思ひよてはわひふれ山橘れ色よて思へ

實あわくちる草し髪と兒の時用物と也 祇注

ふりよきる印存れをのりこもといふ山橘れをこもかたりす

新撰六帖知家哥也榮雅抄云世俗は藪ヤブ棋カキ子コと

ふ草也云云 古歌よむりくしりくといふ

蓬フシ

葎ハハ

漸シヅカ茅カ

壁ヒ生ニ草クサ

草クサ生ニ而シテ

も雑也

木賊キソク

千種チンシュ

毎言抄は千種といふを秋なりといふ花は字々色の  
字と書写すといふの脱ダツ落ラク志シ秋千種といふ草

の別なり一尋ヒ其儀シ雑カなり今昔抄はもわやまら

ありといふ後みへんゆりれあきとも其書写すといふ

又其作者よなりてはあやまらともむりぬりぬりぬりぬり

千種凡夫の志よきあれいふ人刺シへりす



蘿 苔<sup>シ</sup>代類也雜也蘿乃鬢<sup>カウ</sup>同系ハ冬也順倭  
名云日本紀私記云為鬢<sup>ツクニ</sup>以蘿<sup>ツ</sup>

花紅葉 此<sup>コ</sup>ハ冬<sup>フユ</sup>も勿論正花也四ノ内ナリ如此<sup>コト</sup>あり  
四季<sup>シキ</sup>をけ<sup>ケ</sup>る物ハいつ<sup>イツ</sup>も雜也但物<sup>モノ</sup>より

てその<sup>ソノ</sup>流布<sup>リウフ</sup>花紅葉<sup>ハナベニ</sup>此<sup>コノ</sup>句<sup>ク</sup>ハ<sup>ハ</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>す<sup>ス</sup>と<sup>ト</sup>今<sup>イマ</sup>も<sup>モ</sup>も<sup>モ</sup>も<sup>モ</sup>  
よハす<sup>ヨ</sup>す<sup>ス</sup>若<sup>ニシ</sup>現<sup>マ</sup>在<sup>リ</sup>よ<sup>ヨ</sup>如<sup>コト</sup>紫<sup>シ</sup>と<sup>ト</sup>双<sup>フ</sup>て<sup>テ</sup>入<sup>ル</sup>心<sup>ココロ</sup>乃<sup>ナリ</sup>ウ<sup>ウ</sup>なる<sup>ル</sup>  
秋<sup>アキ</sup>の花<sup>ハナ</sup>草<sup>クサ</sup>花<sup>ハナ</sup>な<sup>ナ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>正<sup>マサ</sup>花<sup>ハナ</sup>よ<sup>ヨ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>す<sup>ス</sup>秋<sup>アキ</sup>成<sup>ナリ</sup>へ<sup>ヘ</sup>

松落葉

竹落葉 雜也夏<sup>ナツ</sup>といふ<sup>イフ</sup>説<sup>セツ</sup>

柏 兒<sup>コ</sup>手<sup>テ</sup>柏<sup>ハク</sup>とい<sup>イ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>く<sup>ク</sup>も雜也安加<sup>ヤカ</sup>良<sup>ラ</sup>柏<sup>ハク</sup>  
秋也<sup>アキ</sup>と云<sup>イハ</sup>説<sup>セツ</sup>不<sup>フ</sup>謂<sup>ヘ</sup>也<sup>ヤ</sup>是<sup>コト</sup>も雜也<sup>ヤ</sup>流布<sup>リウフ</sup>

指鹿<sup>シ</sup>云<sup>イハ</sup>馬<sup>バ</sup> 史<sup>シ</sup>記<sup>キ</sup>日<sup>ニチ</sup>趙<sup>テウ</sup>高<sup>カウ</sup>欲<sup>ヨク</sup>為<sup>ス</sup>乱<sup>ラン</sup>恐<sup>コウ</sup>群<sup>クン</sup>臣<sup>シ</sup>不<sup>フ</sup>聽<sup>キ</sup>乃<sup>ナリ</sup>先<sup>マ</sup>設<sup>セツ</sup>

耶<sup>ヤ</sup>謂<sup>イフ</sup>鹿<sup>カ</sup>為<sup>ス</sup>馬<sup>バ</sup>問<sup>ト</sup>左<sup>サ</sup>右<sup>ウ</sup>以<sup>テ</sup>默<sup>モク</sup>或<sup>シ</sup>言<sup>フ</sup>馬<sup>バ</sup>以<sup>テ</sup>阿<sup>ア</sup>順<sup>ジュン</sup>趙<sup>テウ</sup>  
高<sup>カウ</sup>或<sup>シ</sup>言<sup>フ</sup>鹿<sup>カ</sup>高<sup>カウ</sup>曰<sup>ク</sup>陰<sup>イン</sup>中<sup>チュウ</sup>諸<sup>シヨ</sup>言<sup>フ</sup>鹿<sup>カ</sup>者<sup>シヤ</sup>以<sup>テ</sup>法<sup>ホウ</sup>秦<sup>シン</sup>始<sup>シ</sup>皇<sup>ワウ</sup>本<sup>ホ</sup>  
紀<sup>キ</sup>拾<sup>シツ</sup>遺<sup>イ</sup>よ<sup>ヨ</sup>お<sup>オ</sup>け<sup>ケ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>人<sup>ヒト</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>を<sup>オ</sup>れ<sup>レ</sup>ば<sup>バ</sup>な<sup>ナ</sup>り<sup>リ</sup>

猪

瓶 夜分<sup>ヤフ</sup>  
なり

兔 かや<sup>カ</sup>れ<sup>レ</sup>事<sup>コト</sup>ハ<sup>ハ</sup>忘<sup>ワシ</sup>れ<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>幸<sup>サイ</sup>な<sup>ナ</sup>れ<sup>レ</sup>も  
先<sup>マ</sup>例<sup>レイ</sup>乃<sup>ナリ</sup>目<sup>メ</sup>録<sup>ロク</sup>を<sup>オ</sup>れ<sup>レ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>る<sup>ル</sup>也<sup>ヤ</sup>

鯨 夜分<sup>ヤフ</sup>也<sup>ヤ</sup>流布<sup>リウフ</sup>

上



月毛駒

尾花蘆毛駒 新撰六帖知家

熊月輪 新撰六帖衣笠内大臣  
奥山よもひあはぬ月夜にあらぬをいふことさか

鶴巢 同子

鳥 同浮巢

鷗 巢ごりても雑也 新式抄

放鶴 人の此の忠務代事也但ともるれ務不入事也  
哥よハおわりとあり務とくありも雑也夏云非也

野鷹 流布

鷓鴣

鳩

箱鳥

箱鳥 各萬葉 深山よあるる源氏若菜よよ太  
山木よ箱づつささむらむらとあまよりあり或ハ白

鳥 此異名と云云 白鳥ハ巢此一名也  
深山木よふらふらとてぬ箱鳥のあまをいふ事とこそいふ  
雄略天皇代御時義作國つらふ山とつふ所相見  
びんこ云人の婦子と負て山中を行きて就鳥よら  
まきくまやうくとび死死らる故よと名こハハハ  
いことハハヤことつふ心中畧也 河海抄 早來鳥



心者こいつり但八雲御抄よりなるハ定家でも不知之  
只うつろひさきもここのあきしものあつても其分  
くく一頁多れ異名とありたり或連哥の  
書よ春と云云仍尋其義雜といひ

鳥音ホウオン 雜也 春と  
つら非也

蝸牛

蜻蛉

雜也 新式 かけらおれりゆるとすハ春こ虫と云  
ゆいてハ秋なりと云かといひ 五言抄 又ハ軒を  
ハ乱花物と夕と襖よいのらうけととハ是草と  
云といつらん異説也  
今又小書つらやもつるおれりる春日と云ハ物  
と云ハ虫ハあつす 八雲御抄 畧記之 是ハ陽焰也

けりふれと云云あつるハ春と云ハ神とぬと云  
けりふと云云のハあつるハ春と云ハ神とぬと云  
くといつと云云又つるハ春と云ハ神とぬと云  
よいつり一とらぬハ新撰六帖ハ并此公又様神ハ  
虫たものやと云と云ハ藻塩草 畧記之

條鱗 日本ニ呼ニ蜘蛛  
蛛曰一十

蟻

詞花

非春 新式 ありつり春よと云と云といひり  
あつハ植物よ打越し句よと云りて正花といひり  
のくれやつあつと云心也 新式抄 詞乃花と云  
春也正花よ成し只詞花と云ハ春よと云  
正花よあつり同云心乃花詞花何乃つらあり



氏嫌や別あるを答云人れんもまはうさ立やうか  
まハ心の花ハ心花よなる詞の花ハハ并古も人の  
常よんかやうにさうしてあつたといふ花よあつた  
吾言抄よ云詞の花春よあつたといふ今京都よ春よ  
用二雨よわれとありて又二雨よ詞の花似世物の花  
非正花春よあつた然共式ハ花よ面と嫌也自然正  
花よ用ハ仕立もとも雑也こりきり前後相遠でり  
新式よま心あつたこちまハ何れ穿鑿よ不可及  
非降物非冬新式  
鏡雪 同 髪雪 土佐  
述懐也白髪此事也 日記

眉霜 述懐也非  
降物非冬

鬢霜

藤原氏

橘氏

催馬樂

れ〜〜物ハ雑也但青柳〜〜ふ梅〜〜ふ  
ホハ春也 流布 催馬樂ハ昔諸國〜〜流真  
物と大差者一綱一時氏此口す〜〜は謡をり歌な  
ま〜〜と名つ〜〜馬と催と〜〜ハ流つ〜〜物ありす  
お〜〜と催と〜〜 梁塵愚案抄 袖中抄云催馬樂ハ  
譜一条左大臣此時〜〜律呂并〜〜れ〜〜

雛遊

篝火

夏よあ〜〜只雜〜〜 流布 舟よ〜〜  
火と〜〜も夏よ〜〜ハ初〜〜心なり



燈籠

燈籠共書之見温槃經燈檟共見本朝式今按三字皆通稱也

網代車

桃花葉葉云々  
藪之時巨之

布膠

非水邊新式雪し  
日しさす故あり

花田色

正花より露草花としてありと花田色  
といふも花田此等常よりあり  
と秋よりす雜也植物より衣類より  
以上つれも雜也雜此事ハ本ひりよ大綱載之  
又四季此所此後雜此事も注之仍二度不載之

延寶四年林鐘十八日

杉村氏友春撰

温故目錄再返每終にふまのあやむら  
けふ不もなり又これのあやむら  
小四季此系物もやのあやむら  
一してあやむらもあやむら  
の編儀あやむらもあやむら  
あやむらあやむらもあやむら  
中あやむらあやむらもあやむら  
あやむらあやむらもあやむら  
あやむらあやむらもあやむら  
あやむらあやむらもあやむら

西山氏宗固



予一日訪杉村氏友春賢士出公自所  
撰溫故日録而見示仍賦小詩以贈  
書編數帙逞精神意味深長語轉新染國  
詞音猶未絕歡看文質共彬彬

真珠菴州

元文四己未年二月吉日

心齋橋筋順慶町

浪花書林

柏原屋清右衛門

同 与 市

求版



